

中流住宅の平面構成に関する研究

第17報 近代における続き間座敷の存在基盤 (1)

準会員○高崎 幸治^{*6} 正会員 青木 正夫^{*1} 同 竹下 輝和^{*2} 同 友清 貴和^{*3}
同 磯貝 道義^{*4} 同 岡 俊江^{*5} 同 宮崎 信行
同 長島 洋子 同 末広 香織 同 藤田 由美

はじめに

以下の2編は、昭和58年度日本建築学会大会において発表した「中流住宅の平面構成に関する研究 第10報～第16報」(No.5058～5064)の続編である。

明治以降の近代化の中で諸段階を経て必然的に形成された中廊下型平面は、伝統的な座敷を保持し、その座敷に隣接する部屋が続き間をなし、転用型の続き間座敷を構成する点に特徴があった。転用型であるにせよ、続き間座敷が存続するのはなぜか。本報及び次報は、この続き間座敷の存在基盤を考察したものである。尚、接客実態の比較考察では、戦前の有名な物理学者であった寺田寅彦の日記^{注1}(以下寺田日記と記す)と、江戸末期の儒学者の妻であった川合八梅の日記^{注2}(川合日記)を取りあげる。前者は、近代俸給生活者の接客実態を把握するためであり、後者は接客の近代における変化を比較するためである。

① 住生活における接客の二重性

近代の家族住生活におけるさまざまな接客の中で、親族に対する接客には特別な意味があった。すなわち旧明治民法による親族会の法的規定と、相互扶助の家慣行とにより、親族関係は非親族とは異なる関係として特別に重視されていた。

ところで、親族とは何か。旧明治民法では、親族を「六親等内ノ血族、配偶者、三親等内ノ姻族」と規定していた。核家族世帯を基準にみると、夫方及び妻方の双系的な姻戚関係であり、同族とは異なる。

近代国家の形成と資本主義の発達に伴って、郷里を離れた多数の家族が必然的に発生してきたが、その結果、従前の一定地域内に展開していた親族間のつき合い、つまり親族生活は、地域内にとどまらず、空間的な振かりをもって展開されることになった。近代中流住宅の主要な居住階層とみられる俸給生活者家族の親族生活は、まさにその典型であった。

この親族に対する接客は、個々の家族住生活ならみ

ると単なる一接客にすぎない。しかし、親族関係の維持、相互扶助という家慣行の視点からみると、家と家とのつき合いの一つであり、継続的に維持される親族生活の一環である。

このようにみると、住生活における接客は少なくとも二重にみられねばならないことになる。すなわち親族生活の一環をなす親族の接客と、そうでない非親族の接客との区別である。家と家、家族と家族のつき合いは、個人と個人とのつき合いではないということの他に、婚姻を媒介として成立する親族関係者は、その婚姻そのものの継続と、婚姻の結果生じてくる子供の出生や成長に特別の関心を持つという事情も、親族の接客と非親族の接客とを区別すべき重要な差異である。

また、親族の接客は、親族生活の一環として、家を単位に展開されるが、それは個々の住居を単位にすることと同義であった。すなわち、個々の住居は親族生活を展開する重要な場であったのである。それは、来客に対するもてなし方の差異としても表われることになる。

このように、親族と非親族との接客を明確に区別することは、当時の接客実態を正確に見通すために重要であるばかりでなく、続き間座敷の存在基盤を解明する鍵にもなる。

② 日常的接客と親族生活

表-1は、寺田日記と川合日記の1年間の接客を抽出し、それを関係者別に比較したものである。

寺田寅彦は、東京大学に勤務し、郷里は四国の高知であった。この年の7月、父の一周忌を機に母を迎え同居生活を始める。彼の妻の郷里は東京近郊であり、妻方の親族とのつき合いが比較的多くみられる。

一方、川合日記は、紀州藩の藩学校に勤務する夫(養子)と、一子長男が成人に達した時期の武家の接客状況であり、この年に特別な行事は行われていない。

A Study on the Planning of Middle-class Houses

5068

Pt.17 Reasons for existence of tsuzukima-zashiki

in modern ages (1) TAKASAKI Kohji et al.

寺田日記では、年間93日、件数にして117件程度の来訪接客がある。月平均にして8日、約10件の接客であるから、それほど少ない件数とは言えない。しかし川合日記と比較すると、著しい差異がある。郷里を離れた俸給生活者家族の接客が著しく減少することからわかる。

また、同表の関係者別来訪件数をみると、商工関係者を除いて、全体として減少しているが、中でも親族関係者の来訪は全体の半数近くを占め、しかも川合日記と比較すると、減少の割合は小さい。これに対して学校勤務先の職業関係者は、全体の2割にも達しておらず、その変化の割合も大きい。その他の関係者は一部不明を含んでいるが、個人的な関係者、私的な集会の関係者等である。川合日記の場合には、藩学校関係者を除く藩の役人、その家来や従者等も含む。

近代俸給生活者家族の接客は、職業関係及びその他の関係での来訪が著しく減少する中で、親族生活が残り、それが接客全体の中では比重を増していることからわかる。

このことは、表-2の自宅来訪と他家訪問の接客状況にも表われている。自宅来訪の7割は親族関係者は、同時に他家訪問の場合も多い。つまり、親族関係者は日常的にそのつき合いを展開しているということである。もちろん、このようなつき合いは親族の居住地条件に大きく規定されることは明らかである。しかし、居住地が相互に近隣していれば親族生活はより日常的に、より頻度高く維持されていくことも明らかである。

こうして、親族生活は、一つの相対的に独立した生活領域をなして維持されることになる。それは親近感を深めるために寝食を共にし合うという共同寝食行為が比較的簡単になされるからである。例えば、寺田日記の4月29日には、妻の母の宿泊が記述されている。「朝汝口母上博覧会見物に行くとして立寄る。夜泊る。」というように、親族関係者は比較的気軽に宿泊を行い、またそれを受容されるからである。あるいは、オイヤメイなどの親族が遊びに来て宿泊することもある。図-1で、職業関係者の「宿泊」を目的とした来訪または訪問がみられないことは、この間の事情を物語っている。

このように、親族はるが故に、宿泊や酒食の共同行

表-1 1年間の月別接客状況

月別	来訪数		関係者別来訪件数			
	日数	件数	親族	職業	商工	その他
1月	8 (17)	10 (31)	3 (10)	3 (2)	2 (2)	2 (17)
2月	2 (18)	2 (32)	- (14)	- (2)	2 (7)	- (9)
3月	7 (18)	7 (31)	2 (9)	- (4)	3 (3)	2 (15)
4月	8 (14)	16 (27)	11 (9)	1 (5)	1 (1)	3 (12)
5月	7 (13)	8 (17)	6 (6)	1 (4)	-	1 (7)
6月	7 (17)	7 (29)	1 (12)	- (3)	6 (2)	- (12)
7月	11 (19)	17 (26)	11 (8)	- (6)	4 (2)	2 (10)
8月	16 (20)	21 (38)	3 (13)	8 (9)	7 (1)	3 (15)
9月	11 (22)	11 (33)	4 (11)	4 (5)	2 (4)	1 (13)
10月	8 (20)	9 (31)	5 (6)	- (6)	4 (2)	1 (17)
11月	6 (16)	7 (22)	4 (1)	- (7)	1 (1)	2 (13)
12月	2 (19)	2 (33)	1 (9)	- (11)	1 (4)	- (9)
合計	93 (213)	117 (350)	51 (108)	17 (64)	33 (29)	16 (149)

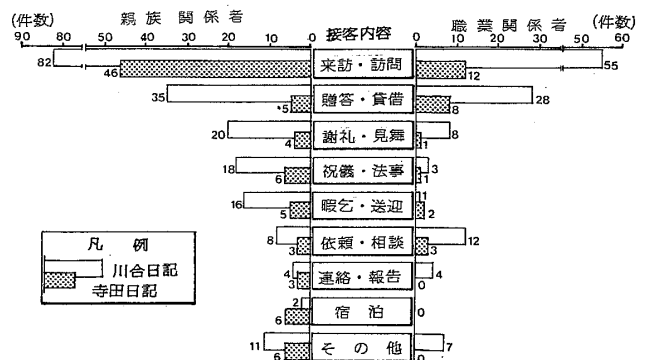
大正3年の寺田日記 (嘉永6年の川合日記)

表-2 関係者別接客状況 (件数)

関係者	寺田日記		川合日記	
	自宅来訪	他家訪問	自宅来訪	他家訪問
親族	51 (43.6)	33 (50.0)	108 (31.8)	88 (39.1)
職業	17 (14.5)	9 (13.6)	64 (18.8)	54 (24.0)
商工	33 (28.2)	0 (0)	29 (8.5)	21 (9.3)
その他	16 (13.7)	24 (36.4)	139 (40.9)	62 (27.6)
合計	117 (100)	66 (100)	340 (100)	225 (100)

()内は%

図-1 親族関係者及び職業関係者の接客内容 (件数)



為か気軽に行われるか、それがまた気軽に受容されるために、座敷が有効に機能したと考えられる。

注1) 「寺田寅彦全集 文学編 日記」第11巻、第12巻 昭和12年岩

注2) 川合小梅著、志賀格春・村田静子校訂

「小春
「小梅日記一暮末・明治を紀州に生きる」1~3
昭和49年、東洋文庫平凡社刊

※1 九大教授・工博 ※2 同講師 ※3 同助手・工博 ※4 同助手 ※5 同大学院生 ※6 同大學生